

の通知をうけ、直ちに馳せ参じた日が八月十五日、陛下のお言葉、終戦である。地団駄ふんで、断固戦うな」と意気まいたが、「召集解除だ、すぐ開拓団に帰れ。」と言われた。思いなおして帰団。開拓団は下学田に集結して暴徒に襲撃されたが、それに対抗したものの、未成年の男子若干名と婦女子だけではどうにもならず、死の協議した。早まって子供と共に服毒し、苦しみ井戸に走る、早く殺してくれと叫ぶ、それをみかねて子供の首をしめ殺す手助けをした。そのあと石油に火をかけた。地獄そのものである。生き残った米司氏は、ソ連に連行され強制労働を強いられたが不思議に生きてきた。それは米司氏の感覚の鋭さ、決断と行動の迅速が、シベリヤから脱走できた豪の者である。

(引揚者団体北海道連合会)

副会長 池田 幸次郎)

## 引揚者労苦

山形県 本間 佐市

風雲急を告げる大東亜戦争は、日本軍の玉碎また玉碎、遂に八月十二日、ハルピン三七五一五部隊に繰り上げ召集となる。前戦の戦闘教練最中に部隊本部前で、無条件降伏、終戦を知る。八月十九日、現地召集全員に対し、解除命令となり、北斗義勇隊開拓団に帰郷する。第一次団員五人、補充入植、静岡中隊約四十人(当時の訓練生)、診療所医師、全員、本部を訪れ、佐伯団長に解除の報告をする。終戦により理想農村建設の夢も敗れ愕然としていたが、苦難の道に入ることに覚悟をし、全員を本部に集め団長決意のほどを、全集団郷宛、伝達するに至る。「伝達」国敗れて王道楽土建設を果し得なかつたことは残念で慚愧に堪えない、しかし敗戦日本の再建のため、これから苦難の道に入ることになる、諸君は、耐えて、生きて帰国することを

念じて止まない。これから寒さに入るが、自給自足に奮励されたい。全員すべて、一致協力、体力を養われたい。翌日から団長は、訓練生は付き添いで鉄驪大訓練所に往復、情報収集に当たることになる。

不可侵条約締結したソ連軍が、大訓練所を占領するに至り、情報収集が困難となる。九月に入ると想像以上に中国人の暴民、掠奪、襲撃が日に日に増し、残酷となり、殺害も続いているという情報である。その後の確認は、さだかでないが、動乱激しくなり、犠牲者多く、安井開拓団長は妻子と一緒に自決、団員の犠牲もかなり多くなっている。他に、青葉、韓家、不二、臥竜、約二百人の犠牲者とも言われていた。

九月十四日、突如として、北斗義勇隊本部前にマーチョ（馬車）二台に銃を持つ警官風体の四人が来て、団長室に入る。襲撃されるかどうかの危険状況になる。団長は真剣に主謀らしき警官に対し好意の処遇、丁重につとめ、日本の敗戦、ソ連兵の侵入、占拠等、話し合っている。昼食には、カレーライスを作り笑顔を浮ばせ机を囲んでいたが、食事が終わった途端、主謀は、

本部周辺の男子、夫人、子供を含め本部講堂に集結を計る。二人の警官らしき者は、威嚇銃で宿舍、官舎、勤農農場で働く婦人も含めて外に追い出し、本部講堂に集結する。短時間で掠奪を計り主として衣服、時計他高級品をマーチョに運び、銃を向け実弾を放ち走り去る。訓練生二人で馬で追いかけて奪取を計ったが、銃弾放射のため戻った。どうにか犠牲者は出ないで終わったが、いよいよ来るべきときが来たことにより、倉庫の必需品、食糧、灯油、個人所有物等、夜間時に大和郷の支援を得、運搬することにする。慶安県、鉄驪県ことごとく襲撃されている。

情報未確認であるが生存者は大訓練所に集結していると聞く。他に岩手、安井、五花、韓家、老永府、臥竜、不二、桃山、依吉密、その犠牲者八千人と聞いている。

岩手開拓団は概ね全滅、中には投身自殺を図った婦女子が抱き合って井戸投身、死にきれないでいる二、三人を救った訓練生の情報である。その後、北斗本部周辺だけではなく、近くにある、大和郷、東宮郷、梨

明郷にも暴民の襲撃を受けているが連日の掠奪、襲撃のため婦女子が命からがら逃避する場面もあつて恐怖から離れないでいる。

その当日、診療所前側溝に倒れていた松谷医師が、暴民五、六人に囲まれ惨殺される。遺体埋葬に三人付き添いで運んでいるときも襲撃を受け、ようやくにして脱出する。大和郷に移した倉庫物資等も掠奪にあつて、避難場所は更に八キロ遠くの三度川周辺までとなる。

まさに地獄一步前という悲壮なる逃避行となつた。体力の衰え、食糧不足、精神力の疲れ、睡眠不足の連日、蜂起している中国人暴民の報復をソ連軍の差止めの待望が大訓練所からの伝達により、九月二十三日鉄山包駅集合の引揚げとなる。

内地引揚げの可能性に不安もあつたが、万事神に祈り、本部前広場に全員勢揃いし、団長の訓示と、埋葬者に深い敬礼、冥福を祈つて出発。道中、木ノ下中隊若者から荷の背負い、幼児のおんぶの手伝いを受け約三時間歩いたため、疲れも大きく、やつとのこと鉄山

包駅へ到着、長い時間、鉄驢俱全体からの避難民の集結のため、遅くなつて列車が動き出す。

客車であつて救われたが、難民は満載となり、おおむね二千人超えていると聞く。列車の中にて地獄をさまよい続け、あらゆる苦難と闘つてきたそれぞれの難民の話が出てくる。自決、栄養失調による死亡、道なき山々を歩き草原の樹木の下で死に別れ、逃避行の長道のため、老人、子供の病い、すべての力果てて死にたくない涙を流し死んで行く別れの言葉、何もかも頭から離れないでいると大粒の涙を流し泣いている。生きて帰国できるだろうかと神頼みしている者、先行き不安になっている者、さまざまである。

列車はハルピン駅手前、三椏樹駅で止まつて客車から降ろされる。何ごとが起きたかはわからないが、誰しも、そのまま大連までも下つて、本国に近づきたいと願つていた。その期待は破れて、暗やみの配車軌道広場である。下車してみるとおよそ二千人近くの難民であろうと聞く。ときおりソ連兵、蒙古兵が近づいてくる。何をしでかすか分からない、髪を切る婦女子

を輪を組んで中に入れ、暴行を防ぐようにする。北滿の夜も既に寒さ覚える季節である、軌道の空地に火を燃やし、暴民、あるいはソ連、蒙古兵に注意しなければならぬ。二昼夜過ぐすと長い行列の無蓋車が入つて来て乗車することになる。

満載の難民列車は荷物同様で身動きも座することも出来ない、ともすると小用にも事欠くというありさまで、婦女子の苦痛がせまっている。途中行き交う有蓋車に日本軍が軍装は新しいが多く、積み込みで苦勞している。駅でない所で双方停止しているためソ連兵が自動小銃で威嚇したり、難民無蓋車に入り込み時計、皮バンド、万年筆等掠奪する。ときにはソ連兵だけでなく暴民も入る。場合によっては、婦女子を引きづり、暴行を加えている。顔色なく戻されてくる。全く行先不明の列車で婦人の丸坊主が多くなった。列車停止のたびに掠奪、暴行が多くなり、双方の決闘となり怪我をし、血だるまとなつている男達も見える。いずれにしても悲壯なる連日、生きた心地がなくなっている。

新京駅に降ろされたのが九月二十七日、食もなく疲

れ果てての死の寸前で、やせ衰えた老人、子供の歩く力のないまま、駅前を通る姿は、お互いがあわれに見える。敗軍の将、兵を語らずであるうが、日本軍の指導者に対する憎しみが募ってくる。駅前通りを歩いてるとき、七、八台の馬車が老人、子供の死体を山積みにし、運搬している。どこまで行くか知らないが馭者が、我等をのぞいてにが笑いで通つて行く。初めての新京市街地、吉野町の人だかりの中に、日本人避難民多数が見える。

ようやくして白菊小学校に着いたが二千人数の難民で、ごった返しである。三日間滞在、夜になるとソ連兵の掠奪となり、新京に着くまで殆どが掠奪されて何もないが、それでも片っぱしから手さぐりする。

新京南大房身が難民収容となる。日本人居留団の案内を受け、現地まで歩くことになった。疲れ果てて声も出ない。現地収容所は関東軍将校官舎であり、恵まれてはいるが、六畳間に十二、三人の割当て、住むことになる。難民らしい生活は、休むときは足元を、たがいちがいにする以外に全く全員一家の家族として生

活することになった。さいわいに電気、水道、便所、台所もある。赤レンガ造りの建物で当時としては、威容を物語るものであったと思う。

これから先何年の生活かはわからないが、取り敢えず寒さが迫るので、燃料の獲得、食べることから詮索に当たるのが毎日の闘いである。居留民団から赤黒い高粱と塩の配給がありそのままで喉から通らない、日本式臼と丸たん棒を作つて餅つき方式を取る。寒さと栄養失調に、発疹チフス、赤痢、ハシカ、老人子供犠牲が多くなった。

大房身から約一キロの草原地帯の中に難民墓地が出来上がっている。一か月もたたないのに千個の土マンジュウ型墓地になる。私の幼女「ハシカ」のため、高熱が続き遂に帰らぬ子となった。

佐伯団長以下、私も含め緑園小学校前に二十歳以上の男性の登録命令があつて出頭、何百人という列を作っている。早い者順で夕方になつても順番が来ないので大房身に戻る。その五日後、登録者はソ連抑留となつたことを知り驚く。

僅か前にはソ連兵のベテンにかかり、祝賀行事に使役としての募集、食事をつけるという条件で七十人ほど応募、マンドリン自動小銃で前後を固められ南嶺收容所に連行され、抑留されていることを思い出す。以後ベテンに乗せられないように全員に伝達する。

新京の寒さも北滿鉄驪大訓練所と比較すれば温暖であるが、かなりのきびしい零下になる。八路军と、中央軍との市街戦が、二、三日続き八路军の使役として四、五日募集されているが、生きた心地がしなかつたと言う。南嶺の捕虜となつていた一人が脱走に成功し戻つての話の中に、新京の元大同大学で、鉄条網は二重、三重に張り巡らし、その中に北支方面の日本兵が収容されており、兵士は終戦になつても満州を、通過しウラジオオから日本へ帰られると信じて收容所に入れられたとのこと、ソ連軍は捕虜員数を増すためあらゆる手段で罫に引っかけようとしていることがわかつた。

捕虜の毎日は猛家屯の貨物厩倉庫に並び、あらゆる物資を貨物列車に積んで、シベリアに送る作業を強いられ、南嶺と猛家屯の間をトラックで通っている。そ

の作業が終ると捕虜はシベリア行の身体検査となり、十一月、上旬、シベリアに向けて出発、十九歳以下、身長の高い者、十五人残留、他の友、捕虜となって悲しい別れを告げたと聞く。

大房身難民の栄養失調による犠牲者は、後をたないで墓が広がる。越冬を凌ぐための燃料を探さなければならぬ、手っ取り早くは、旧日本軍兵舎を取り壊す以外にない。より頑健の若者を選ぶとともに、命がけの勝負である。周囲から出てくる鉄兜、サイダー瓶、その他何であろうと食べられる物は、みな運ぶ。収容所近くに軍の人びとで、野菜畑を作り、トドキ、アカザ、等摘んでくる。満人部落で働きに出て、食を得る、帰りにも食べ物乞う、なんでも口に入れるものは捨てないで貰うこと。私も栄養失調で悪質のおできを出し、臨時診療所に通い治療を受けていたが、はかどらず先行不安になる。越冬を随分と長く感じた。暖房用燃料は、欠乏近くなっている。

やがて春の日射しとなり、新京市街吉野町は、難民、市街住居の日本人、賑やかに商いする者で混雑してい

る。薬品を求めため吉野町に出かけたところ、私と同じ出身地の親戚夫妻と偶然に出会う、夫妻の渡満を知らなかったが、幼少からの面影が残っている。夫人は看護婦になり生家を出ているので私のことが浮かんてこない。言葉を交わし、ようやくにして、双方の認知となり驚きと笑いが交錯する。恥ずかしい私の、変装、髭面に分からなかったらしい。

夫妻は牡丹江駅前で、食堂経営で繁昌し、終戦と同時に新京に集結している。あまりにもひどい小生の瘦せ衰えを見、収容所伝染病から脱出のため当面、市街地に出ることを勧められる。団長の許しを得、妻と共に吉野町阿部氏住居に世話になる、人知れず客人の出入りがあって、満鉄とのかかわりか、本社理事、駅長他である。終戦で中国人にすべてが移っており、彼等は、おおむね売り食いの様子である。翌日から私は一人で街角に出て商いすることになる。

戦前とはうって変わり、中国人の抗日思想そのもの、四、五人の、集団で右、左と散らばり、値の呼びかけに答えているうち、殆ど反物、衣類は間引かれている。

委託された品々が消えている。泣くに泣けない失策を演じ、謝罪のみ。その後、藥品斡旋ブローカーを始め、儲けもあつたが續かない。炎熱の夏、かき氷売りに転じ大きく繁盛したが、コレラ発生で、販売中止となる。その後十字路の隅っこで上級パンを売り出す。ありし日、ソ連軍将校が立ち止まって、「日本人の帰国が近くなっている、元気で帰りなさい。」日本語での言葉である。驚くやら喜ぶやら、一人で泣きじゃくる。阿部氏宅で、全員六人、祝杯揚げて喜び合う。

中央軍、八路軍の戦況、風雲急の情報もあつて帰国の可能性を心配したが、運に恵まれ帰国の日となる。大房身の難民収容所にいる同志他、約二千人の難民より、一か月遅れて無事帰国したのが、昭和二十一年十月三十日である。

昭和二十年八月十五日、負けるはずのない神国日本はあわれにも無条件降伏、五族協和、王道楽土の農村建設の夢は破れ、現地に残された日本人の開拓者は苦難の道を歩むことになる。他国の領土を武力で侵略したのが開拓者、義勇隊の移住だけに、報復ははげしく

莫大な犠牲を強いられたのは勿論である。だが生涯を賭けての満州移住であり、青春を、大平原、土地を忘れたがたく、機会あれば北満地を踏み過去を省りみ、無謀極まる侵略の犠牲になつた同志の慰霊をなぐさめたいと願っていたところ、計らずもその機会に恵まれた。

一九八七年、六月八日から六月十八日まで十泊十一日間の、日中友好山形県拓友会訪中として参加することになった。総員百十四人を十一分団に分け、団長齊院武次氏他、副団長、秘書長、通訳、随員による成田空港前ホテルでの結団式をおえ、中国大陸に旅立ちするということは夢想もしなかつたが、訪中団の一員として参加出来たことを考えると、今昔の感慨ひとしおである。

東支那海をひとつ飛び上海の上空から北京へ方向を変える。中国大陸を流れる揚子江、大陸に広い広い耕地が絵のように見える。北京市上空を旋回して空港の滑走路に着陸する。予定の時間が十六時でハルピンに飛ぶ筈のものが、二時間以上遅れて北京空港発十八時ハルピン行の中国民航機に乗る。雲にさえぎられ、万

里の長城は見えなかった。長春上空を過ぎて、ハルピン上空から懐かしの松花江が夕陽に照らされキラキラして見える。

午後八時三十分ごろ、飛行機はハルピン空港に着陸する。黒竜江省となっているハルピン市人民政府関係者の一団が「熱烈歓迎中日友好訪中団」の横断幕を張り出迎えに感動する。日本市街に見るような街燈はなくネオンも極めて少ない。当時ハルピンは森の都として有名であった、今も大樹は堂々たる風格を保っている。午後十時も過ぎていたが人民政府主催の歓迎会となり、黒竜江省人民政府の高官を初め、多くの列席で、歓迎の挨拶を受け拍手となり、訪中団団長より御礼の挨拶、乾杯。地元産のビール、ワイン、中国酒を交わし、日本の歌も覚えて披露し拍手。中国料理で、日中友好の感激で終る。

六月十日、方正の日本人公墓を訪問の日程であり、現地慰霊祭を執行することになっている。午前六時バスに分乗して出発。二連式バス、トロリーバス、いずれも日本製、舗装道路も簡易舗装、労働者の出勤時間

で混雑している。珍しく可愛い驢馬車も走っている。行けども行けども直線道路、日本国道路では見られない道巾と街路樹が美しく並んで気持ちよく、みごとである。驚嘆するのが、水田地帯で、満々と水をたたえる水路は田植えを終っていると、最中の田もある。昔の日本式で、代かきを牛を使っているところもあり、とにかく広大である。

ハルピンを出発して五時間以上走って方正市街に入る。閑静な丘に木立に囲まれた大きな石碑が見える。周囲は鉄柵で囲み美しい花が植えてある。日本の終戦で犠牲になった場所、方正県は松花江の流域で豊穰な土地で日本人開拓者が多かった。もともと現地中国人が耕作していた農地で、強制買収し人植したところであり、中国人の襲撃で犠牲が大きかったと聞いている。

特に暴民による掠奪、飢えと寒さ、ソ連軍の攻撃、襲撃、伝染病など犠牲の数が多く、死亡七百五十人、行方不明百七十人、他から流入した者四千人、滞在中死亡者千七百三十七人、中国人に身を寄せた者三百二十一人、奥地から逃れ集合滞留した日本人八千人を越



え、翌年春まで約三千人の死者を出していると言われている。方正地区には未だ多くの残留日本人がいる。訪中団一行は二人の僧侶の読経とともに焼香し霊の冥福を祈る。

六月十一日、発車時間が五時間も遅れて、鉄山包駅に到着、四十二年前の鉄路は複線となり鉄道沿線の両側には、どこも街路樹を植えている。沿線の風景は一変し、下車して鉄力街までは舗装道路でなく馬の背のごとくバスは大きくゆれる。道沿いに建物は、レンガ造り、店舗も点々として見える。どの店舗も品物は不足である。中国人の愛想と親切は今も変りない。四十二年前の引揚げの駅と別れるときの印象は今でも残っている。

駅前には倉庫三棟、駅員舎二棟、鉄道警護隊宿舍三、四棟、鉄驪大訓練所通りに日本人経営食堂、電信電話公社があった。現在は鉄道の両側に人家、工場がびっしりと建ち並んでいる。昔の面影はなく市街地と化している。思い出深い第二の古里でもある。日曜日毎に城内に出て中国料理、写真撮影、油ポイ菓子、若い花

嫁五、六人を連れての買物など浮かんでくる。城壁は取り除かれて県庁跡地に現在の県、人民政府となって姿を変えている。宿舍となる鉄力賓館に案内され、通訳の王さんの話では、竣工間もない館と聞いた、近代的三階建てのホテルで豪華である。三階から見渡すと市街と旧大訓練所、独立守備隊兵舎、神社等旧日本の建物はすべて取り除かれ工場地帯に煙突が多く見える。想像できない変貌に驚く。

六月十二日、待望の北斗義勇隊開拓団は、夢にまで見ていただけに複雑な心境になる。かつて忘れたことのない、青春の古里で、いささか興奮と緊張で顔色が赤くなる。バスに県人民政府外事办公室主任が先導し、元大訓練所の東側を抜けて北斗本部前で停止し、十七人の私どもは、周囲を見回す。日本部の入口だけは同じ方向であるが、中は元の印象は全く消えて中国人農家が整然として建ち並んでいる。終戦によって永遠に別れの地となったのだが、掠奪、襲撃、惨殺、逃避行、地獄のさまよいの連日等、死との闘いが甦ってくる。取り取えずジープに乗り、北斗の終点三道川で下車。

元五花義勇隊訓練所跡も見える。小興安嶺と連なる桃山、鋸山、馬鞍山の山並に向かってなんの変わりもないことに感激の涙こぼれる。この奥地で匪賊との戦いで出動した守備隊の地帯も近くに見える。北斗入植したとき、森林鉄道の開通なつて鉄山包駅近くまで大木を運んだだけでなく、いろいろ利用したのも浮かんでくる。現在も同じように動いていた。三道川の上流に水田を広げ自給計画を進めた地帯も懐かしいと思つた。

第三集落、凌霜郷今はなく、近くに農家集落が見える。奥地に入る時間もなく元黎明郷の近くに中国人農家集落が並んでいる。周囲一望は広々畑になつて、元拓魂碑もなく同じ場所に林野局弁公室が建てられている。慰霊祭を畑の隅っこで行う。黎竜郷もなく二道川と本部までは広い大草原で、両側は麦と牧草地帯となつていた。大和郷もなくなり、近くの集団農場と思われるところに大集落が出来ている。レンガ工場、学校もある。大型トラクター五、六台と大型コンバインも並んでいる。水溜まりには家鴨が遊んでいる。

再び元本部跡地に戻る。元宿舎、診療所、倉庫、事

務所、勸農農場畜舎等総じて跡型なく、暴民の襲撃で亡くなった松谷医師を埋葬した地点は住居、雑木丸太置場となつていて、その場で合掌し松谷医師夫人と共に冥福を祈る。夫人の痛々しい姿。いつまでも手を合わせていたが遺骨の掘り起しは不可能となつて残念ながらその場を離れることにした。

集落の人びとが、ぞろぞろ集まつて側まで寄つてくる。この地は、元の練兵場の存在の広場になつていた。全部が農家の街並みであり、飼犬も多く出てくる。周囲では家鴨が遊び回り、賑やかな農村風景であり、若い婦人達が子供を抱いて歓迎してくれる。少ないチョコレートを渡す。

聞くところによると、農民の多くは、南京より更に南の地から移住して来たという。それにしても友好的な態度で呼びかけてくるが言葉の通じないのが、悔やまれてならない。時間に余裕がなくなり、集落農民の幸せと前途中国の食糧基地を目ざし繁栄を祈るのみ。近代の農機具も日本製、大平原、悉く畑地となり、水田作を広げる計画を進めるに違いない、宝庫地農業を

嘗む農民婦女子と手を振り、いつまでも別れを惜しむ。見学日程が佳木斯、牡丹江、となつてゐる。

六月十三日、佳木斯に着いたときは夜の九時半も過ぎていた。宿の賓館にバスで向う。市内にネオン少なく暗い夜景で驚く。ホテルは立派ではなく、便所、洗面所の設備が悪く、ハルピンホテルとは比較にならない、入浴するのに湯が出ない、風呂、便所付ではあるが水も出ない、フロントに交渉しても係が違うので担当出来ないと言う。

翌日市内見学、松花江の河幅が一段と広く千メートルはありそう。輸送船が航行し、さまざまの船がタグボートに引かれたハシケ、とにかく船の活動が盛んである。佳木斯市の人口、三百五十三万人と聞いて驚く。戦前は八万人で、医科大学があつて、北斗訓練所から二人が卒業している。現在山形県で開業している。市内は舗装されている。交通整理が実に貧弱、トラック、バイク、自転車、馬車、歩行者の混雑で警笛を鳴らしつ放しで、油断ならない。

郊外に出ると、十階ほどの高層建築が多く見える。

工場、それとも労働者住宅であろうか、通訳王さんの話では「東北有三宝」と呼ぶほどの漢方薬が盛んに造られていると聞く。市内デパートに並んでいる三宝の一部に、虎・熊・貂・狐・大山猫・鹿の毛皮が豊富である。強壯剤として人參、鹿の角、漢方薬は海外に輸出していると聞く。

駅前広場には、中国の大偉人、毛沢東のすばらしい大きな像が立っている。帽子を持って左手を後に回し、右手を高く上げ人民大衆の歓声に応えている。

中国は乗客に対し、時間には極めてルーズで遅くなることも、早くなることはない。北京からハルピンまでの飛行機・ハルピンから鉄驪、鉄驪から佳木斯、佳木斯から牡丹江いづれも遅れるのが平常と思わなければならない。佳木斯駅からも遅れて出発、牡丹江駅に到着したのが夜九時過ぎていた。やはり暗い夜で、牡丹江公園に着いて下車しようとしたが、明日に回まわして宿舎、北山賓館に着く、十五階建ての豪華なホテルである。疲れも出ているので夕食を食べて、一風呂浴びて休むことにする。

六月十五日、牡丹江市内見学、自由市場、ショッピングセンター、毛皮デパート、元日本人街、元日本人学校、珍しくも日本人建築をそのままに使用している。戦前の牡丹江は旧日本軍の前線基地として最大の兵力が存在していたと聞く。街角にコンクリート製の銃眼のあるトーチカがある。しかしこれは、文化大革命の時、紅衛兵が反動との内戦に構築し、トーチカから街角の別のトーチカにつながる仕かけで現在は埋められている。日曜日のデパートに入る。行き交う人びとで賑わっているが、買わない人が大多数、豊富な品物は並んでいない。電器製品、衣類も不足というだけではなく、電器製品は一か年の労働賃金に値するとも聞く。公園は広大な施設、遊び場では休日の親子連れが多い。公園入口正面に、一九三一年九月十八日の柳条溝事変以来一九四五年八月十五日、日本降伏までの亡くなった抗日戦の英雄戦士、祖国解放戦争で亡くなった英雄を顕彰する記念碑が建立されている。宿ホテルを出ると便所が不潔で日本人では考えられない。

午後四時二十分発北京行特別列車に乗り、ハルビン

に向かう。壮快である。通訳の王さんと一緒である、彼は大学卒業して以来、奥さんとの生活、さまざまの話を交わし退屈を凌ぐ。中国は農民は二人まで出産、他は一人だけ出産、違反すると反則金を取られる。日本語はむずかしいが合格して通訳専門に働いているとのこと。王さんは、九州、大阪、東北の方言が上手で、お互いに笑い出す。ハルビンまでの時間は長く、大陸らしきを知る。列車での食事を済ませているので長旅横になったり疲れも出ているが、各地旅して見学十分に満たされている。ハルピンに午前零時も過ぎて到着。

六月十六日、ハルピン市内見学。元訓練所時代、用件があつて随分と往復し懐かしい思い出深いハルピンである。児童公園に案内されて児童列車に乗る。案内人の説明では一九五六年、国際児童デーによって完成し本来は児童専用で造られて親子共ども乗って遊びだけでなく、労働力、精神力、同志のつながりを養う等々、現在外国人向けの観光地として活性化を計っている。主として日本人が多く遊覧列車で子供達が管理し、小学校四、五年生の男女が運営している。美しい制服

を身につけて男の子はスイカイブルー、女の子は黄色のスカート、黄色のワンピース、真赤なスカートを袴に巻き運転手、車掌、検札係などワッパンを付けている。鉄道はジーゼル機関車と六両の客車を連結し全長二キロ、北京、ハルピンの駅に一行にならびテキパキした動作がすこぶる可愛らしく印象に残っている。

六月十七日北京に到着。最終の北京友誼賓館で大歓迎を受け、中国人民政府主催の盛大なお別れの会が催され、民族色豊かな歌や踊りを披露され、思い出深い訪中の旅を終って六月十八日無事成田空港に到着する。

#### 執筆者の横顔

本間氏は大正十年、山形県温海町で町村合併前の山戸地区生まれ、学卒して家業に従事していたが、温海町を見るに日本海沿岸と温泉町で観光地として栄えているが四囲は耕地少なく山林地多く、なかならず奥地は国有林、当時は貴重な薪炭事業が盛んであるところから山林地の生産物で生計をたてているものが多かった。

何としても青年に、特に二、三男が希望のもてるものに、何かをなさねばならんと、既に学業を励んでいる時分から、ひそかに海をへだてて満州大陸へ雄飛し、満州の青年と相協力しあって、理想的社会づくりに躍進したいものと夢を描いていた。

その頃、新聞に、満蒙開拓青少年義勇軍の記事をみて、青年本間佐市氏が、かつて夢に描いた通りの満蒙開拓である。直ちに役場で手続きを了し、

昭和十三年六月、内原満蒙開拓青少年義勇軍訓練所に入所した。

本間氏は、この義勇軍に入って人生の行路が決定づけられた。

彼は、根っからの正義派、曲ったことは一切うけつけない、悪敵幾万人あろうとも正道を踏まんとする信念、しかも困っている人には涙を流して相談に応ずる純情一筋に生きる品性と人格を青年時に何時の間にか自ら築いていた。

昭和十三年七月渡満し、更に鉄驛青年訓練所修了、次に北斗小訓練所も修了し同十七年に選ばれて入った

満拓公社の經理講習所を修了、その間、優秀な成績が認められ訓練所本部の經理部勤務を命ぜられた。

金銭を扱う業務は本間氏に任せれば、何ら憂慮なしの定評を得た彼の前途は洋々たるものがあつた。

しかるに何ぞ凶らん、同二十年八月、ソ連の越境進攻にあい、義勇軍を日本軍と同一視したのか、ソ連軍の襲撃、暴行、掠奪、殺傷、言語に絶する悲惨事にあつた、本間氏は幹部職員として生命をなげうって隊員対策誘導していたが、運よく故郷に引揚げられた。

故里の町長外有志の方々は、本間氏の青年時代から知っておられる、直ちに町役場の書記に採用、副収入役、出納員、議会議務局長、その間、幾度か町議會議員に推されたが、遂にことわりつづけ、現在は町の監査委員に選任されて就任、引揚者団体支部長として親しまれ尊敬されている仁徳の上。

(社)引揚者団体全国連合会

副理事長 結城 吉之助)

## 大陸に生まれ、大陸に育つた「或る男の生涯」

岐阜県 川村 一正

### 渡満の動機

明治三十七年、鉄道省に勤めておつた父は日露戦争開戦と同時に、野戦鉄道部隊要員として、満州に渡り、朝鮮との国境の町、安東（現丹東）、奉天（現瀋陽）間の鉄道建設に技師として当つたが、戦争終結と共に、明治四十年創立された南満州鉄道株式会社（満鉄）に、就職し、日本におつた家族、母、姉、兄を呼び寄せた。家族が渡満したのは、明治四十年の冬であつたので、朝鮮の新義州と安東の間の凍結した鴨緑江を櫓で渡つたという。私は、大正三年奉天の近郊、陳相屯で生れた。

当時、旅順、大連、奉天、長春間の鉄道沿線両側各二十メートルは、関東軍により編成された独立守備隊二個大隊に依り、警備されており、主要都市は、鉄道